

自治労北海道衛生医療評議会公衆衛生集会
平成27年9月12日発表

「医療連携推進事業」を通じて 考える苫小牧市の多職種連携

高齢者等の地域ケアを進める会

事務局 池崎 一士

当会のご紹介

苫小牧市において、昭和50年代後半より福祉・医療・行政の相互連携が意識的に模索され、老人福祉施設指導員部会や苫小牧市福祉事務所老人福祉係を中心に、病院MSW、苫小牧保健所保健師等も加え定期的な研修会や宿泊研修を行ってきました。

平成8年3月に行われた宿泊研修時に、地域の高齢化に伴う独居・夫婦のみ世帯や認知性高齢者・要介護高齢者の増加傾向が一層明らかになりつつある状況から、地域生活の継続性を支える保健・医療・福祉分野のネットワーク組織化の必要性を討議し、全員の賛同を得て発足しました。

平成8年会員 35名 平成27年現在会員数 355名

〔活動内容〕

- ①保健・医療・福祉分野にかかわる職員の情報交換や研修会
- ②関係機関・他団体との連携
- ③地域の社会資源の把握と開拓
- ④その他、目的達成のために必要な事業

〔世話人〕

世話人代表 苫小牧市三光地域包括支援センター センター長 本間 啓介

世話人 10名

〔会費〕

1,000円/年 一人

「医療連携推進事業」とは

北海道の事業で、医療の必要性の高い要介護者が増加する中で、必要な医療・介護サービスを継続・一体的に受けられるように地域における仕組みづくりを検討するなど、医療と介護の連携強化を図ることを目的とする。

事業内容

〔検討会の設置・開催、取り組む事項〕

- ・ 医療と介護の連携に係る地域課題の洗い出し
- ・ 地域の社会資源把握
- ・ ネットワークの基盤整備
- ・ 検討に必要な調査
- ・ 連携のための地域ルールの検討、作成、運用及び検証
- ・ その他地域の課題についての検討

〔医療と介護の連携研修会開催〕

- ・ 講演
- ・ 事例発表
- ・ 意見交換
- ・ その他地域の課題についての研修

事業期間・予算

- ・ 平成24年度～平成26年度の3年間
- ・ 93万/年

3年間の活動内容

◎ 内部検討会 4回～6回

当会世話人会での事業方向性、実施方法、実施後の評価等を検討

◎ 他団体との協議

苫小牧ケアマネジャー連絡会、苫小牧市地域包括支援センター連絡協議会
日胆地区MSW協会、苫小牧市医師会事務局、北海道看護協会苫小牧支部

◎ 他団体との事業連携

苫小牧ケアマネジャー連絡会、苫小牧市地域包括支援センター連絡協議会
と共に医療連携についての協議・研修会の共同開催を実施
日胆地区MSW協会と医療連携研修を共同開催。昨年の研修を踏襲しグ
ループワークを展開
北海道看護協会苫小牧支部へ研修会開催方法等のアドバイスをもらう
苫小牧市医師会との研修会協力
苫小牧市医師会・市役所と統一書式について協議

◎ 団体代表者協議

苫小牧ケアマネジャー連絡会、苫小牧市地域包括支援センター連絡協議
会、
当会の代表者で問題点の共有と課題解決への協力、研修会の企画等を確認

3年間の活動内容（3）

◎講演会 4回

第1回 いまい内科クリニック 今井 浩之医師

第2回 尾道市医師会前会長 片山 壽医師

MSW・ケアマネジャーからの実践発表

第3回 「病院と地域のスムーズな連携作り」

大阪府高槻赤十字病院看護師長 原田 かおる氏
看護協会と共催。退院支援看護師による講演。地域の看護師も参加。

第4回 「地域包括ケアにおける医療と介護の連携」

淑徳大学教授 結城康博氏
市・MSW・包括職員によるパネルディスカッション

◎先進地活動実践視察・研修会参加

会員・関係団体から参加者を募り、同じく医療連携推進事業を受託している千歳市の現状把握と行われている研修会に参加

◎講演会・研修会DVD作成・配布

会員、関係機関に配布

◎ホームページの立ち上げ

FC2を活用し、長期的使用を可能とした

3年間の活動内容（4）

- ◎医療機関・ケアマネジャーへのアンケートの実施
外来・入院・退院・サービス担当者会議等について実態把握、理想について調査
MSW協会調査と合わせて評価
- ◎統一書式の完成と運用
苫小牧ケアマネジャー連絡会、MSW協会の協力を得て原案を作成・HPに掲載
苫小牧市・苫小牧市医師会と協議・継続
「主治医意見書作成のための問診票」が26年10月より運用開始
- ◎事業所ガイド（介護保険事業所）の作成
苫小牧市地域包括支援センター連絡協議会で作成した事業所ガイドを引き
継ぎ、更新しホームページに掲載した
1市4町に拡大し掲載
- ◎病院窓口ガイドの作成
地域病院の窓口を確定し、連携を取りやすくしていく。
マニュアル作成から地域ルール作りを模索していく
- ◎苫小牧保健所提案事項「在宅医療連携システム推進事業」
についての協議
協議を行う中で、新たな方向性と地域医療を核とした連携のため下地作りができそう

24年度の活動の振り返り

◎ 問題点が山のようにあることがわかった

- ・ 各団体の連携が不十分
- ・ 医療サイドは連携・地域に十分目を向けることが出来ていない
- ・ 在宅医療が手薄 ・ 看取りの土壌がない
- ・ ケアマネの病院への理解不足 ・ 病院のケアマネへの理解不足
- ・ ケアマネ、介護職のグループワーク力が弱い
- ・ 連携の仕方がわからない……etc

◎ 事業が広範囲で的を絞るのに手間取った

- ・ 各団体を集めての協議会の設置案
- ・ 医師会等との共同事業開催案
- ・ 地域実態を調査する案
- ・ 看取り普及のための活動案
- ・ 医療機関間連携案
- ・ 当会事業のみ実施案
- ・ 施設・医療機関間連携案
- ・ ケアマネと医療機関連携強化案……etc

◎ 25年度への道筋が出来上がった

※片山医師の講演から当会でできるシステム作りを行っていくこととした

2 5年度の活動の振り返り

◎ 的を絞った活動を展開することができた

「ケアマネと医療機関連携強化のためのシステム作り」とし、アンケート調査・集計分析・新たな事業計画へとつなげることができた。

◎ 調査結果から弱い部分への強化策を立てることができた

特にケアマネジャーの連携意識、グループワーク力、共通理解に対して研修を組むことができ、継続も確認できた。

医療機関と共に研修等を行っていくことの必要性を感じることができた。

◎ 統一書式作成の必要性を確認することができた

医療機関・ケアマネジャー共に情報交換の必要性を認識しているが、システムとして存在していないため実施できていないことがわかった。

◎ 活動を通じて新たに連携できるMSWや積極的な医師に出会えることができた

今後の活動の幅を広げられる可能性を見出すことができた。

◎ 各団体等との協働に目を向けることが課題として浮き彫りとなった

研修の共催や会員参加依頼等で他団体と連携を図っていたが、共に問題点を共有し研修会等を作り上げていく認識に温度差があり、一方的なものとなっていた。

活動を通じて見えてきたこと

◎ ケアマネジャーはなぜ医療との連携を強めたいと思っているのか

- ・ 医療連携により介護報酬に加算がつく
- ・ 利用者様の多くは何らかの疾患を抱えており、それが多ければ多いほど、どのような注意点があるのか、どのような視点を持ってかわればよいのか不安が多くなる。その不安を解消し適切なサービスを展開していくためには、医療からの情報は欠かせないと考えている。

◎ 医療はなぜケアマネジャーとの連携を強めたいと思っているのか

- ・ 連携により診療報酬（保険点数）がつく
- ・ 医療と介護の連携（チーム）により在宅看取りを進めたいと考えている医師がいる
- ・ 自宅での生活や退院後の生活を知り看護計画等に活かしたいと考えている看護師等がいる
- ・ 医療ができることには限界があり、在宅を支えるためには介護がしっかり支えてもらわなければ困ると考えている医師がいる

◎ 連携の基本は「顔の見える関係づくり」と「共通言語」「共通理解」である

- ・ ある市でPCによる医療間、医療と介護間のネットワークを構築したが、先細りで使われなくなった。ものがあっても相手先が見えなかったり、必要性がケース等を通じて感じられなければ、お金をかけても無駄。
- ・ 忙しい職員同士が情報交換や会議を開催するためには、共通言語を確立させ、効果的なものにしていく必要がある。
- ・ そのためにも、お互いのことを理解しあわなければ、関係づくりができない。

活動を通じて見えてきたこと（2）

◎ ケアマネジャーのグループワーク力はついてきました

- ・ 連携にはグループワーク力が欠かせません。
- ・ 数年前であれば主張の仕合になりかねないGWでしたが、研修を重ねることで、多職種の意見を聞き、理解を深めるためのGWになってきました。

◎ 医療機関により連携（情報交換）等に関する差がみられる

- ・ 積極的に看取り等を含め在宅医療を展開している病院がある
- ・ 情報提供や院内でも多職種連携に取り組んでいる病院がある
- ・ 診療に忙しく、在宅や連携に手が回らない病院がある
- ・ 医療優先を貫いている病院がある

◎ ケアマネジャーには未だに医療関係者を苦手と考えている人がいる

- ・ 何を聞けばいいのかわからない、どの場面で聞けばいいのかわからない、誰に聞いたらいいのかわからない等で踏み出していないケアマネジャー
- ・ 医師のもとを訪れて冷たくされた、情報提供したのに返信がなかった、退院前に打ち合わせたのに、いざ再入院となった時に受け入れてくれない等過去の経験から尻込みしているケアマネジャー

◎ 医療関係者には未だにケアマネジャーがわからない人がいる

- ・ ケアマネジャーがどんな仕事をし、役割を担っているのかわからない医療関係者
- ・ 医療や治療のことを理解しないで、何でも聞くケアマネジャーがいる。勉強不足だと思っている医療関係者
- ・ ケアマネジャーの質にムラがありすぎると感じている医療関係者

活動でできなかったこと

- ◎多職種連携のための研修会に医療関係者を参加させることができなかった
 - ・連携を確立、強化していくためにはグループワークは効果的な方法と考えます
 - ・今までの研修会にはケースワーカー、薬剤師、リハスタッフ、訪看の参加を得ることができましたが、病院医師や看護師の参加はほとんどなく、関係づくり・共通理解等を図るには程遠い状況でした
- ◎連携・情報交換ツールが中途半端な状態である
 - ・医師会、市役所と協議のうえ「主治医意見書作成のための問診票」をスタートさせましたが、医師の必要性から進んだことで、情報発信とはなりましたが、情報交換ツールとはなっていません。
 - ・当会で作成し、ホームページに案として掲載してはいますが、正式な情報交換ツールまでにはなっていないのが現状です
- ◎苫小牧市の医療連携の現状を捉えきれていない
 - ・ケアマネジャー、医療機関へのアンケート調査を実施（HPに掲載）してはいるが、十分に全体をとらえることができていたのか疑問が残りながらの展開であった。
 - ・又、3年間の活動を通じてどう変化したのか検証が不十分であると感じている
- ◎連携のスタートとなる窓口ガイドが不十分である
 - ・事業所、医療機関ともに全てを網羅してのHP掲載とはなっていないし、制度変更等により最新版となっていない状態である
 - ・HPに掲載し周知しているが、どこまで周知できているのか、活用されているのか検証がなされていない。

どのような連携が必要なのか

27年度の介護保険、医療保険関連法の同時改正から見えてきている、医療ニーズの高い利用者（患者）においても在宅で支えていくことが必要となり、看取りも在宅率が高まる可能性がある中で、利用者（患者）中心の体系をどのように苫小牧市で作っていくべきなのか。

◎ 医療機関と在宅サービス（ケアマネジャー等）との連携

- ・ 総合病院との入退院や通院での情報交換等のルール作り
- ・ 一般病院との入退院や通院での情報交換等のルール作り
- ・ 医院（町医者）との通院での情報交換等のルール作り
- ・ ケースワーカーのいない医療機関との入退院や通院での情報交換等のルール作り

◎ 医療機関間の連携

- ・ 総合病院、一般病院、医院との機能分化を地域を挙げて取り組む必要がある
- ・ 医療ニーズの高い利用者（患者）を在宅で支えていくためには、医師の存在は不可欠である（在宅支援診療所の役割は大きい）
- ・ 入退院後切れ目のない支援を行っていくためには、入退院前から病院と医院が情報交換等を行う必要がある（主治医制の導入？）

◎ 医療機関と施設との連携

- ・ 医療ニーズの高い利用者（患者）や看取り対象者の受け入れ場所の一つとして施設を挙げている。
- ・ 施設が看取りを行うためには、医師の協力が不可欠である。

多職種連携を具体化させていくためには

多職種連携を個人レベルで考える専門職は多いように思われる。

「一つ一つのケースから担当者間の連携を深め拡大していけばよい」と考え実践されている方もいますが、担当者が変われば一からのやり直しとなることも多く、地域に根ざした活動とはなり切れないのが現状ではないでしょうか（地域が大きければ大きいほど散発で終わり）。

◎多職種連携はシステム作りとして考えていく

組織や団体同士が連携のプロセスやルールを共有し、職種の役割等が明確となれば、次に引き継がれ、担当者が変わっても同じことが実践されていく。

◎システムを重層化することでより強固なものとしていくことができる

- ・地域システムの構築は多くの活動と連動できる。当会は高齢者のシステムと考えたが、児童や障がい者等を巻き込んだ一つの活動とすることで、スリム化（シンプル）し地域に根ざしやすいと考える。
- ・「専門バカ」ではダメ！！

◎リーダーシップを発揮できる明確な窓口の設置

- ・活動の範囲が、医療機関・サービス事業所・地域・住民にまで及ぶことから、総合的に動くことができる明確な窓口が必要である。
- ・市内部も多数の部局が関係することから、横断的に活動ができるよう再編が必要ではないか（上記のことから、今回苫小牧市に要望した）。

多職種連携を具体化させていくためには（２）

◎参加団体の選出

- ・活動が全市的（独自のスタイル）なものにするためには、広く参集していくことに越したことはないが、同じ土壌に立つまでには時間もかかり、花火を打ち上げてもすぐ萎んでしまった経験をされた方も多いのではないか。
- ・キーとなる数団体を抽出し、協力関係づくり、問題の共有と共同解決を行う中で連携を深めていく（連携のモデルづくり、他団体が参集した時の受け皿）。



- ・他団体が参集した時のサポート体制を整える。

◎地域課題の抽出

- ・活動は全市的（苫小牧独自のスタイル）なものであり、関係者のみの変革であってはならない（例：在宅看取りの風土がなければ自宅に帰すことすら困難）。
- ・広く問題を抽出し、多くの英知をもって解決していく必要がある。

◎目標の設定

- ・活動目標を設定する（例：退院時カンファレンス開催数が60%以上、在宅看取り件数を増加させる...等）。
- ・年次目標、計画、実行、検証がなされなければならない。

◎多職種連携を構築するための研修（顔の見える関係・共通言語）

- ・各団体が「多職種連携」をテーマとした研修会を開催し、他団体が協力していく。連携職種や団体が同じ土壌に立つ必要がある。



- ・各団体が協力した総合的な研修を実施する。

多職種連携を具体化させていくためには（3）

◎情報交換や活動におけるルール作り

- ・各機関により違いが出てくるため、こまめに調査、調整し作成していく必要がある。

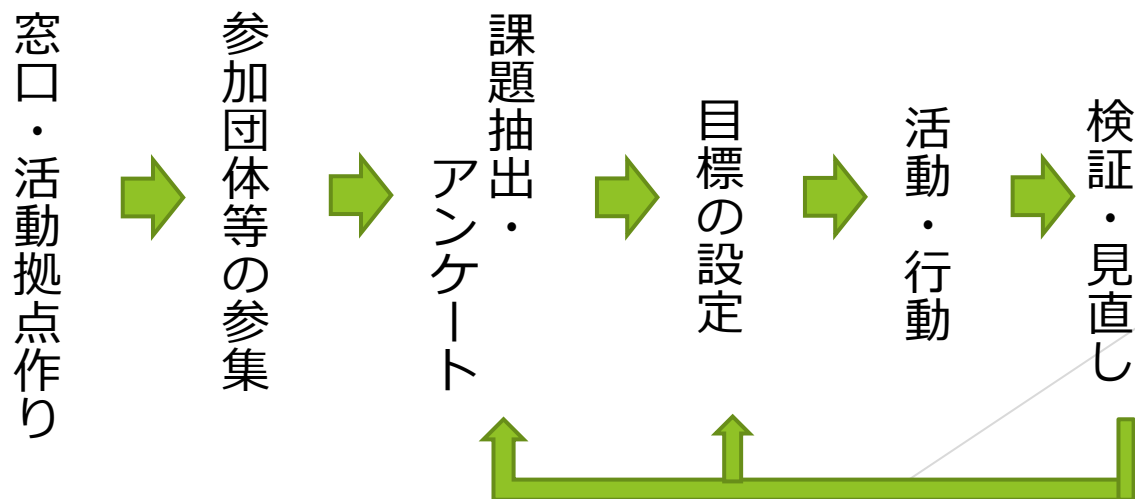
◎モデル事業の実施

- ・市内医療機関等で「モデル事業」的に実施・検証を繰り返すことで、普及を早める効果があると考ええる。

◎地域住民への普及

- ・取り組んでいくことと、地域住民の意識が乖離すると、良い活動も定着しないと考える。

◎多職種連携にもPDCAサイクルは必要



最後に当会での今後の取り組み

当会で3年間活動を行ってきましたが、十分な成果をあげられたとは考えてはおりません。やり残したことを当会でも検証し継続していくことが役割であると考えております。

又、部会に積極的に関与し、部会運営の隙間を埋め、活動の幅が広がるよう協力していきたいと考えております。

◎ 関係団体（現在3団体）合同研修会の開催

地域包括支援センター連絡協議会、ケアマネジャー連絡会との協議を続け、多職種連携を深めていくためのグループワークを中心とした研修を実施していく。

◎ 他団体への支援の強化

各団体への研修協力（ノウハウ）、講師派遣、研修案内配布、共同開催提案 等

◎ 事業所ガイド・病院窓口ガイドの整備

・事業所ガイドを再整備し、関係機関のみならず、幅広く活用されるよう検討実施していく。

・病院窓口ガイドを全病院網羅させていく

◎ 連携シートの活用促進

連携シートが定着することを目標にアンケート調査等を実施していく。

◎ ホームページの活用

・上記を含め、当会ホームページの活用方法を再検討する。

ご清聴ありがとうございました。